

Discovery of an anomalous non-contact effect with a pyramidal structure

ピラミッド型構造物が関与した特異な非接触効果の発見

高木治¹、坂本政道²、世一秀雄¹、小久保秀之¹、河野貴美子¹、山本幹男¹¹国際総合研究機構(IRI)情報研究センター、千葉県千葉市稲毛区園生町1108-2²(株)アクアヴィジョン・アカデミー、千葉県成田市津富浦1228-3

概要

我々は2013年に、ピラミッド型構造物(Pyramidal Structure: PS)の中に、瞑想者が「居る時」と「居ない時」との違いによって、PS頂点に置かれたキュウリから放出されるガス濃度が、約20%変わることを報告した(“瞑想者によるキュウリに対する非接触効果” O. Takagi et al., *IJPS*, 8(15),647-651(2013))。

今回の本論文では、瞑想者による非接触作用が、PSと関わって、十数日間という長期にわたり、キュウリに対して非接触効果を及ぼす未知なる現象(“ピラミッド型構造物が関与した遅延を伴う特異な非接触効果”)を発見した。非接触効果の長期変化は、制御理論における過渡応答現象の数式を用いて近似することができた。

目的

PSという機械的な可動部分もなく、既知エネルギーの供給もない単純で静的な構造物が関与することによって、PS内の瞑想者による非接触作用が、物理的に離れたPS頂点に置かれた生体センサに対して非接触効果を及ぼすことを、厳密な科学的な実験と検証によって実証することを目的とする。

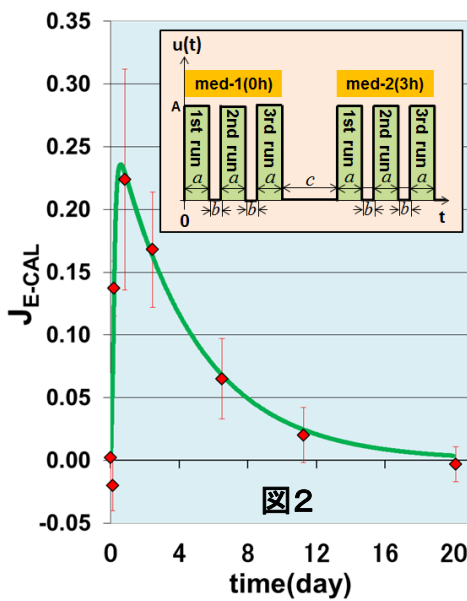
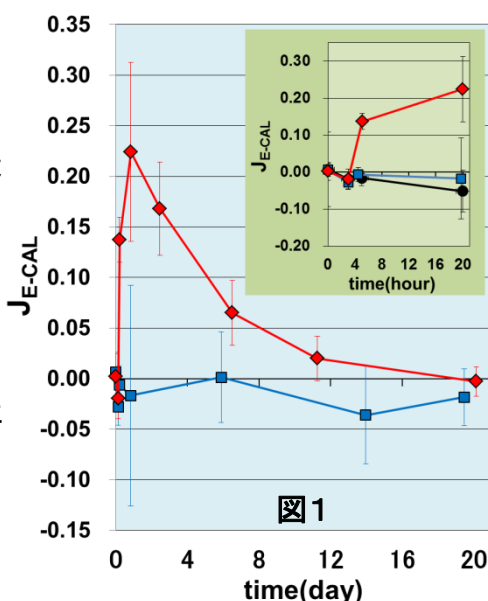
実験と解析

- (1) 実験方法: 生体センサとして、食用キュウリ切片を使用した、ガス測定法を実施した
- (2) 試料作成: 零点同時補正法に従って、実験試料(PS頂点設置)と対照試料(PSから8m設置)を作成
- (3) PS: 4側面がフラクタルパターンでデザインされ、内部に音を反響するドームを備えたピラミッド
- (4) 瞑想方法: ヘミシンクによる瞑想。瞑想中、試料を意識しない。瞑想者: 坂本政道(ヘミシンク歴22年)
- (5) 解析方法: 実験・対照試料のガス濃度から較正J値を計算。較正J値が非接触効果の大きさを示す

実験結果と理論曲線

図1は、瞑想開始から約20日後まで、PS頂点における非接触効果(J_{E-CAL} : 較正J値)の変化。◆が夏データ、■が冬データ。◆は瞑想後にJ値が増大し、約20時間後に最大値となった。その後、減少し約20日後に、ほぼ0となった。(遅延を伴う特異な非接触効果)

図2は、夏データと理論曲線。瞑想者による非接触作用がPSに蓄積後、別の作用に変換され、変換された作用がキュウリに影響する2段階反応を仮定した。過渡応答現象による理論曲線は、実験結果を良く近似した。



結論と考察

- (1) 単純で静的なPSが関与することにより、瞑想者による非接触作用が、生体センサに対して十数日間という長期にわたって非接触効果を及ぼす、全く新しい現象、“ピラミッド型構造物が関与した遅延を伴う特異な非接触効果”、を発見した。
- (2) 瞑想終了後、約5時間が経過した後、PSが関与した生体センサに対する非接触効果の存在を、 $p=3.51 \times 10^{-6}$ (Welch's t-test, two-tails) という極めて高い統計精度で実証した。
- (3) 瞑想者による非接触作用は、生体センサに対してリアルタイムで非接触効果を及ぼさず、PSと関与することによって、遅延を伴う特異な非接触効果の原因となるという結論を得た。
- (4) 遅延を伴う特異な非接触効果という、現代科学においては全く未知なる現象を、既知の科学分野である、制御理論における2次遅れ要素系の過渡応答現象の数式を用いることにより、実験結果を非常に良く近似することができた。

PSの未知なる機能の解明は、社会に多大なるインパクトを与え、科学的な応用分野が広がる可能性がある。